

阪神・淡路大震災30年 企画展
1995 ⇄ 2025 30年目のわたしたち
2024年12月21日(土)～2025年3月9日(日)



兵庫県立美術館
学芸員 小林 ただし 公



参考：束芋《dolefullhouse》2007年 兵庫県立美術館蔵
©Tabaimo/Courtesy of Gallery Koyanagi

2025年1月17日に阪神・淡路大震災から30年という節目を迎えるに際し、兵庫県立美術館は6組7名のアーティストによるグループ展を開催します。1995年1月17日の震災では、兵庫県立美術館の前身である兵庫県立近代美術館（1970-2001）も建物や収蔵品に大きな被害を受けました。同館を引き継ぎ、2002年に震災復興の文化的シンボルとしてHAT神戸に新たに開館した当館では、これまでも震災後の節目の年に関連展示を開催してきましたが、今回が初めての特別展会場での自主企画展となります。

1995年から2025年までの30年の間に、アメリカ同時多発テロ（2001年）、東日本大震災（2011年）、ロシア軍によるウクライナ侵攻（2022年）、そしてイスラエルとハマスの武力衝突（2023年）、能登半島地震（2024年）と、世界は多くの自然災害や紛争に見舞われてきました。明るい未来を想像することはますます困難な状況となっていますが、そのような時代に求められる希望とは――。簡単には答えの出ないこの問いを、それでも、あるいはだからこそ考え続けるための、ひとつの場となることを目指し、本展を企画しました。束芋（たばいも）、田村友一郎、森山未来と梅田哲也、やなぎみわ、米田知子という世界を股にかけて活躍するアーティストたちが美術館の思いを受け止め、新作あるいは本展のための新たな展示構成をもって展覧会にのぞみます。これに國府理の代表作も加わります。アーティストとその作品、何らかの出来事と、それらと出会うみなさんが展覧会という場に束の間集うこと。言い換えれば、今それぞれに生きる「わたしたち」こそ「希望」の出発点にほかならない、そのような思いが展覧会名に込められています。ぜひ美術館にお運びください。



米田知子《震源地、淡路島》1995年
国立国際美術館蔵
©Tomoko Yoneda/Courtesy of ShugoArts

※この企画展は、みなと銀行文化振興財団が助成しています。